

登校拒否・不登校を考える夏の全国合宿2010 in 福島

講演「肯定的な存在論的な引きこもり論へ」

講師 芹沢 俊介 さん

今号では、福島の全国合宿でご講演いただいた、芹沢俊介さんのお話を掲載します。芹沢さんは『引きこもる情熱』から8年を経て、今秋『存在論的引きこもり論』を上梓されました。その間に進めてこられた、引きこもりの理解についての、より深められ整理された考察が、今回のお話で紹介されています。

斎藤環氏が打ち出した「社会的引きこもり」論の根底にある「引きこもりへの否定性」が、長らく社会を呪縛してきたことを指摘するとともに、より根本にあるべき「存在論的引きこもり」論を新しい視点として浮き彫りにします。そして、これまでないがしろにされがちだった、当事者主軸の視点、「引きこもる主体」を取り戻す必要性や、「社会的自己」と「存在論的自己」との関係性など、深い考察が展開されます。

どうぞ、じっくりお読みください。

はじめに

まもなく書店に並びますが、『存在論的引きこもり論』という本を書き下ろしました。書き下ろしは半分くらいで、残りはこれまで引きこもるといって問題に関して考えてきたことを書いたものを一緒に収録するという形になりました。

2002年に『引きこもるといって情熱』という本を出しまして、それから8年たったわけですが、その時点から、「存在論的引きこもり論」というモチーフをもっていました。「社会的引きこもり」という観点、あるいは「社会的引きこもり論」という考え方に対して、かなり強い違和感を持っていましたが、その違和感に、自分の中で言葉を与えてみたいと思っていたのです。

この違和感の正体はなんなのだろうかというところ、そして、この違和感に言葉を与えることが、そのまま「存在論的引きこもり論」という新しい視点になっていくのではないかと。「存在論的引きこもり論」という視点を持つことで、その視点そのものが、一種の「存在論的引きこもり」という現実に対する修復というか、自己回復というか、あるいは自己治療というか、そういう営みになっていく、そういうモチーフで書きました。

「社会的引きこもり論」から「存在論的引きこもり論」へという転換ということが、最初の大きなテーマということになるんですけども、なぜ「社会的引きこもり論」に対する違和感、そして「存在論的引きこもり論」へという転換、移行ということ考えたのか。そんなことを今日お話してきたらと思います。

「引きこもる」ということに対する肯定性、等身大の受け止めというふうに言ってもいいのですが、これが「存在論的引きこもり論」の出発点になります。そして、場合によっては最終的な到達点でもあるわけですが、これがなぜ難しいのだろうか。なぜ、「社会的引きこもり論」の枠を我々は出られないのだろうか。そこで、「社会的引きこもり論」の枠組みを出るということが、「存在論的引きこもり論」への道におのずと繋がって行くという構想を立てました。

二つの壁

そうやってみると、「社会的引きこもり論」から「存在論的引きこもり論」へ、あるいは「社会的引きこもり観」から「存在論的引きこもり観」へと移行していくための道に、大きな壁が立ちふさがっているというふうに思えるようになりました。この大きな壁については、とりあえず二つ申し上げておきます。

一つは、「社会的引きこもり論」、あるいは「社会的引きこもり観」という考え方、これを成立させているものの基盤に、否定性があるんだということです。引きこもることに対する否定があるということです。この視点を核にした「社会的引きこもり観」、「社会的引きこもり論」というものが、突き崩すべき大きな壁の一つということになると思います。

引きこもることとは、あつてはならない事態であるという考え方。そのことによって、いつの間にか引きこもっている本人・当事者をないがしろにして話が進んでしまう。そんなふうにして、「社会的引きこもり論」と

いうものが作られているということ。それは否定性なんだということ。これをはっきりと認識することですね。認識することによって、「社会的引きこもり論」の枠組みの外へ出るということが、僕らがなすべき作業の一つというふうに考えています。

もう一つの大きな壁があります。これは人間観というふうに言っているのかなあと思うのですが、社会的自己だけが自己であるという人間観。それは、たとえば引きこもってしまったら、社会的自己が自らの在り方から失われていってしまうわけですから、この考え方からすると、社会的自己を失った人間、引きこもっている人たちは、この社会に存在している意味や価値はないと言うんですね。そういうとらえ方になっていってしまいます。

はたして我々人間というのは、社会的自己だけでなりたっているのだろうかという問いかけをしていく必要があるのではないかと。社会的自己、つまり何かすることによって成り立っている自己のあり方です。他者との社会的な関係の中で規定されてくる自己のあり方、つまり社会的自己のことを、僕は「する自己」という言い方をしてきたんですが、「する自己」だけで、人間というのは成り立っているのだろうか。そうだとしたら、引きこもってしまい、社会や職場から撤退し、学校へ通えなくなり、通わなくなった、そういう自分というものは、価値も意味もないということになるのだろうか。これは、どう考えてもおかしい。

たとえば、お年寄りのことを考えてもいいと思います。サラリーマンが60歳、65歳で定年になる。もうやるものがなくなってしまう。社会的自己を喪失してしまう。社会的自

己が自分から遠ざかってしまう。そういう人は生きている意味、価値というものがいないのだろうか。もし、社会的自己だけが自己である、社会的人間だけが人間であるという考え方に立つ限り、定年退職した人は社会的存在として機能しなくなっているということによって、存在理由、そこに生きている価値・意味がないということになってしまう。これは、おかしいのではないか。

年をとるということ、何かができなくなるということは、人間が無用化してしまうことだ、そんな見方ではたして人間というものの理解が十分なのだろうか、という問いかけをしてみたいと思うんです。社会的自己だけで人間は成り立っていない。社会的人間だけが人間なんじゃないということが、お年寄りを考えた時に出てくるわけです。

だとすると、もう一つ、人間というのは、そこに存在しているだけで、価値や意味があるのではないかという視点を導入していく必要があるのではないか。そこで、「社会的自己」と「存在論的自己」という言葉を作ってみました。その二重性として、人間というのが、成り立っているというふうに考えることができるならば、社会的自己が今ここで失われていても、存在論的自己、つまり、あなたは、そこにそのようにして存在しているだけで、価値があり、意味があるんだということを言いうるということができる。

その視点が無い限り、年をとって、社会から無用になっていけばいくほど、社会的自己から遠ざかるわけですから、その人の存在理由というものがなくなってしまう。でも、年をとったって、何かができなくなっただって、そこにその人がいるだけで、大きな価値があり、意味があるんだという視点をどうも作れ

そうな気がする。そのために、社会的自己だけで自己が成り立っているのではなくて、同時に存在論的自己という、この二重性で、自己というのが成り立っているんだ。そう考えるならば、社会的自己が喪失しても、もう一つの存在論的自己、こちらの方が根底的なあり方ですから、これがしっかりとあるということによって、我々はその存在を、一個のかけがえのない人間のあり方として認めていくことが可能になるのではないか。

二つの大きな壁に立ち向かうに当って、一つは社会的引きこもり観の根底にある否定性という、引きこもるといふことに対して、それはあつてはならないことだという考え方、これをどう始末するかということ、これをはっきりと我々の前に取り出して、「社会的引きこもり観」の根底には否定性があるんだということを目の下にさらすということが大事だということです。それはできたような気がします。

もう一つは、社会的自己と存在論的自己の二重性として人間は存在しているのであって、社会的自己だけで人間というのは成り立っているのではないんだということ、この二重性という視点をとることによって、「社会的引きこもり論」の二つの壁を壊していけるというか、穴を開けていくことが、可能なような思いをもっています。

「社会的引きこもり論」の否定性

少し具体的に、「社会的引きこもり論」というのが、どんなふうに否定性を内部にもって現れているのだろうかということ、どんな形で「社会的引きこもり論」の中に否定性が現

れ、この否定性が我々をどれほど縛っているかということをお話ししてみたいと思います。

「社会的引きこもり論」の出発点というのは、「状態」という言葉になります。つまり引きこもっている状態というところから始まります。あるいは、この言葉にイメージ、像をつけて、「状態像」という言葉が出来上がっていくんですけども、精神科医、お医者さんなんかだと、この「状態」にイメージの像をつけて状態像と言っている。この「状態」から「社会的引きこもり論」は出発しています。

つまりここでの「状態」というのは、引きこもること、社会から撤退した状態ということ、社会から撤退し家族以外の人とのコミュニケーションが、なくなってしまうという状態です。この「状態」という言葉は、1860年代から70年代頃、西欧の精神医学者たちによって使われ始めたと言われています。

たとえば、不登校だったら、今まで学校に行けていたものが、学校に行けなくなる。これは発達の停止ではないか。あるいは、行けていたことが行けなくなるのだから、これは退行ではないか。引きこもっている人たちの問題で言えば、今まで職場に通えていたものが行けなくなってしまった。これは、社会からの後退であり、退行ではないか。これが、状態ということの意味になります。

「状態」というのは否定性に媒介されて、異常の台座という意味をはらんでいきます。異常の台座の上に異常が開花していく。「状態」というところから出発し、この「状態」が否定性に媒介され、異常の台座というふうに変化していくと、後はこの異常の台座の上に異常が開花していくということになります。異

常とは何か。これは、「社会的引きこもり論」の定義を読むことで明らかにすることができます。

今から10年ぐらい前に、斎藤環という精神科医が『社会的引きこもり』という1冊の新書本を書きました。これが、いわば「社会的引きこもり論」を社会に蔓延させてしまう力になったわけです。斎藤環の社会的引きこもりの定義を読んでみると、状態から出発して、否定性に媒介され、その状態が異常の台座というところに向かい、そして引きこもることが異常性として開花するという現実をみるができるように思います。

社会的引きこもりは「25歳までに問題化し、6ヶ月以上自宅に引きこもって、社会参加しない状態を持続しており、他の精神障害がその第一原因と考えられないもの」と定義されるわけです。25歳までに問題化しという、「問題化」という言葉。これは、状態に入ったということの意味します。つまり異常の台座に乗ったということです。25歳までに問題化し、自宅に引きこもって社会参加しない状態というものが6ヶ月以上続く。そうすると、それは異常である。

つまり、引きこもっている、社会から撤退して自宅に閉じこもっている状態を「問題化」という視点でとらえていきます。それが6ヶ月以上続く、これは、もう異常の台座に乗っていますから、異常そのものとして開花した姿です。あつてはならない事態、つまり異常事態ということになります。その異常は治療の対象になるのです。

そしてその治療は全て精神科医が行う。ここまでが、1999年に斎藤環が提唱した社会的引きこもりの定義ということになります。治療の対象であるということも既に否定性です

し、異常であるということ、問題化ということも否定性。つまり一つ一つの言葉の積み重ね、概念の積み重ねが、すべて否定性に貫かれている、このことに僕らはなかなか自覚化できないままこれまで来たのです。

全部否定性じゃないか、こと行為に対して、あってはならないこと、よくないことという否定の認識、感情、概念によって貫かれている。このことを僕らはまずはっきりと自覚し認識するということ、これがわりと大きな「存在論的引きこもり論」への第一歩を形作るといふふうに思います。

斎藤環の定義は「6ヶ月以上社会参加しない状態が続いている」という文言ですが、この6ヶ月以上というのは何なのだろうか。これは、いろいろこれまでも僕自身問いかけて、自分の中で自問してきました。実は、6ヶ月以上というのは根拠がないんです。これ、1年と言っても、3ヶ月、9ヶ月と言っても変わらない。でも、よくわからないのは、なぜ6ヶ月以上という言葉を入れたのだろうか。これにはいくつかの意味があるのです。問題化という視点と、6ヶ月以上ということが結びついているのです。

つまり、6ヶ月という視点をとることによって、問題化した時期というものを確定しようとする。そういう働きがあります。問題化して6ヶ月以上経ったのか、まだ6ヶ月経っていないのか、あるいはいつ問題化したのかという、引きこもりの状態に入った、異常の台座に乗ったというこの時期を確定するという働き、そして現状はどのくらい経っているかということの働き、それをこの6ヶ月以上という言葉が担う。ここまでは、実はそんなに難しくなく分かった。

「引きこもり」を問題視する本質

けども、もう一つ何かすっきりこない。なぜ根拠のない6ヶ月という視点を入れたのか。これについては、「あっ、そうか!」と気がついたことがあります。それは、社会という視点を入れることによって、どうやら解決が付きそうだ。あるいはもう少し厳密に、社会的秩序と言ってもいいかなと思います。

社会的秩序という視点を入れてみると「引きこもる」ということが、なぜこれほど大きな問題になってきたのかということの本質が見えてくるように思います。社会的秩序という視点を入れた時に何が言えるかと言うと、一定の青年期に達した者に、社会がその秩序を構成していくために求めるいくつかの要素があります。社会から若い人たちに要求するものが3つあります。

一つは、労働するということ。もう一つは、結婚し子どもを生む、つまり家庭を作る、社会をもう一回再生産していく役割、これが結婚→出産ですね。三つ目がコミュニケーション、この3つは、社会秩序がうまく機能していくために、一人一人に要求してくる問題です。この3つの要求を引きこもるという行為が全部無化してしまう。あってはならないという否定性はどこから生まれてくるかと言うと、実は社会秩序という視点から生まれてくる。

社会秩序という観点に立った時、働かない、コミュニケーションをとらない、社会の再生産に参加しない、つまり結婚しない、家庭をもたないということは社会秩序の安定性を壊す働きをしてしまう。引きこもるということは、社会秩序から見た時、大変大きな問題になるんだ。あってはならないと言った時、そ

のあつてはならないと言う主体は誰かというふうに問いかけた時に、実はそれが社会秩序なのだ。だとすると、6ヶ月というのは、社会秩序が、社会が、我慢できる限界ということを物語っているわけですね。

もう一つ、精神科については、どういう歴史性、つまり精神科医がなぜ生まれ、どういう存在理由をもったかということと繋げて考えてみると、よくわかるわけです。精神科医の誕生というのは、社会保安上あるいは社会防衛上の意識と非常に密接に結びついている。つまり社会防衛あるいは社会保安の維持者の役割を精神科医が担うのです。精神科医と社会秩序というものは、実は切っても切れない関係にあるんですね。

そうしてみると、斎藤環が先程言ったような定義、つまり「25歳までに問題化し、6ヶ月以上自宅に引きこもって、社会参加しない状態を継続している」ということ、それは治療の対象だと言った時、彼は社会秩序と一体になって、発言していたんだということが見えてきます。6ヶ月の根拠というものは、全くないんだというふうに申しあげましたけれども、探っていくと、実は社会との関係性の中で出てくる。

社会秩序がこれ以上我慢の限界だという、その限界点を6ヶ月という期間は示しているのではないか。だから1年であろうと9ヶ月であろうとどうだっていいんだけど、その期間限定ということが物語ることは、社会の許容の限界性を示しているんです。

斎藤環の定義というものの根深さ、そういうところに我々がいつの間にか絡めとられている。引きこもるということに対してなぜ我々が否定の視線を持ってしまうのかということと、この定義自体がとっても深く関わっ

ていて、この関わりの部分を解きほぐしていくという作業が意外とやっかいなんだということ、そのやっかいであるということと、とにかく言葉にしていく作業によって、「社会的引きこもり論」あるいは「社会的引きこもり観」に穴を開けていく、そこを突き崩していくことができる、そんなふうに思います。一人の精神科医の発言が、実は社会秩序と深く連動していたということ、そこに引きこもりに対する否定性というものが、基盤を持っていたんだということ、そういうことを知っておいていただけるといいなあと思います。

引きこもる主体の問題

もう一つは、結局「社会的引きこもり論」が社会防衛上あるいは社会保安上、社会秩序の側からの要請として出てきているとするならば、当然そこからこれまでの「社会的引きこもり論」の現実が見えてきます。それは、引きこもる本人・当事者に対しての優先権というものを全く与えない、つまり当事者不在、本人不在の考え方で組み立てられてきたということです。もしこれが否定性をベースにした「社会的引きこもり論」でないならば、もっと本人・当事者に則して、「なぜ引きこもるのか」という問いを発してきてもよかつたはずです。ところが、なぜ引きこもるのか、という問いは発せられたとしても二次的、三次的なんですね。

第一次的にはあつてはならないというところから出発しています。だからそれは改善されなければならない。その改善をするのは、すなわち治療を行うのは精神科医だ、という論理が強く押し出されてきていて、なぜ引き

こもるのかという本人主軸の、当事者主軸の考え方というものが、大きくないがしろにされてきた。これを本人・当事者主軸の考え方に転換していくという作業が必要になってきます。つまり引きこもる主体の問題ということです。

引きこもる主体の問題というのは、実はこれまでまったく手付かずでありました。なぜ手付かずであったかと言うと、先程触れたように、自己というもの、人間というものを、社会的自己、社会において何かをする、何かをしている、何かができるという、そこだけで人間をとらえてきたことと大きく関わっています。そうではなくて、人間というのは、社会的自己と存在論的自己の二つによって、二重によって成り立っているんだというふうに考えるならば、そこで初めて、引きこもる主体の問題を問うことができる、そのように僕は考えてきたわけです。

これは、難しいことでもなんでもなくて、僕らは誰でも一時的な引きこもり、一時的な社会関係からの撤退ということは、いくらでもやっているわけです。要するに、ある会合に行き、その会合で嫌な思いや怖い思いをしたならば、二度とその会合に近付きたくないと思う。これは、一時的な社会的撤退です。要するにこれが職場で起り持続すれば引きこもりということになります。けども、一時的な引きこもり、一時的な撤退に対しては、誰もそれを状態という視点でとらえない。あるいは、問題化という視点でとらえることはしない。しかし僕らは日常的にやっているわけです。

たとえば、源氏物語の勉強会がある。行ってみたいと思うのは社会的自己です。勉強したい、「する」というところで成り立ってい

る自己です。しかし勉強会に顔を出したが、どうもその空気があまりよくない。先に勉強会に出席した人たちが閉じたグループを作っていて、初めてきた自分をまるでよそ者が入ってきたような顔で迎える。その目つきが、なんで入ってきたのという目つきになる。嫌だなあ、嫌な場所だなあ、こんな場所に長く居たくないなあ、そう思うのは、存在論的自己です。

存在論的自己というのは、姿としては捉えにくいですけれども、この場の空気を、この空気はゆったりと呼吸ができるか、それとも、浅く息をつめるようにしてここに居なければならないのか、その環境なり関係なりの、そこに自分がいられるかどうか、いやしい場所かどうかということを感じ取る。それが存在論的自己なのです。

存在論的自己がその場で安定しているならば、存在論的自己の安定性に支えられて、その上に社会的な自己が乗っかる。源氏物語の勉強会に顔を出した。みんなが、歓迎しますというふうに迎え入れてくれるならば、存在論的自己はそこで安定し、安心しますから、源氏物語の勉強会に入っていくことができる。社会的自己がそこで機能することができる。

そういうふうに、存在論的自己と社会的自己の二重性という視点をとることができる。この社会的自己を「する自己」、存在論的自己を「ある自己」というふうに言っていると思います。つまり存在論的自己が安心を感じたり、安定を感じない限りは、社会的自己というのは、うまく機能しないんです。こういう視点をとると、引きこもるという問題も、社会的自己と存在論的自己、あるいは「する自己」と「ある自己」のこの二つの視点から、理解していくことができます。

他の例ですが、職場の中で同僚とうまくいけなくなりました。その同僚が、どうも上司と気脈を通じて、自分に対して排除するような態度をとってくる。職場が居にくいなあというふうを感じる。それがだんだんひどくなっていく。いたたまれなくなると、朝職場に行こうと思った時、起きられなくなってしまう。いたたまれなくなると起きられなくなってしまうのは、存在論的自己、つまり「ある自己」の方なのです。この「ある自己」が、安定性を失うと社会的自己、つまり「する自己」が機能なくなってしまう。

これからわかると思いますけれども、引きこもるということは、存在論的自己が最初なのです。先行するのです。存在論的自己が先に、ここはもうだめだよというふうに訴える。それに社会的自己が呼応している。存在論的自己が引きこもるということに、社会的自己はついていっているんですね。引きこもるということは、存在論的自己が先であって、社会的自己は後になります。

つまり引きこもりというのは、存在論的引きこもりの現れにすぎない。存在論的引きこもり、存在論的自己が、その場にいたたまれなくなってしまうということ。そこで、傷つき耐えられなくなると、もうこれ以上ここにいたら、自分が壊れてしまう。そうなった時、「ある自己」存在論的自己は、この場に対して、もうここには居られないという判断をくだし、引きこもっていきます。「する自己」社会的自己は、それにくっついていくだけなのです。

社会的引きこもりというのは、現象であって、本質は存在論的引きこもりなんだということです。こんな作業をやることで、社会的引きこもりの中心にある否定性を超えて行け

るような気がするんですね。存在論的引きこもりが先行しているのだとすれば、社会的引きこもりという言葉はもういらなくなっていく。僕らは、存在論的引きこもりということについて考えを進めていけばいいというふうになるわけです。

厚生労働省の「ガイドライン」

ところが、今年の5月に厚労省が「引きこもりの評価・支援に関するガイドライン」というのを発表しました。引きこもりというのは、支援の対象であるというふうに捉えていくんです。引きこもりというのは状態である。あるいは、引きこもりというのは現象であるという、基本的には社会的引きこもり観なんです。

こんなふうに定義します。「さまざまな要因によって、社会参加を回避し（不登校も含まれます）原則的には6ヶ月以上に亘っておおむね家庭に留まり続けている状態。原則として非精神病性の現象であること。しかし実際には、精神障害が関与している場合がまれではない」というふうに。こういう定義をガイドラインがやっているわけです。わずかな違いを別にすれば、ほとんど斎藤環の社会的引きこもりの定義をそのまま踏襲してしまっている。このガイドライン、どこかで目に触れるのではないかと思いますので、ガイドラインを読む時に、次の点を注意して読んでほしいなというところを申し上げます。

一つ目は、斎藤環の定義を踏襲していますから、社会的引きこもりという考え方に立っているということ。したがって、ベースは否定性です。引きこもるということに対して、

否定という立場で書かれているガイドラインということですが。

二つ目は、人間理解として、先ほど申し上げた社会的自己、あるいは「する自己」をベースにした理解であるということ。「ある自己」、存在論的自己に対する視点がまるでないということですが。

三つ目は、引きこもりを精神障害に位置づけようとしているということ。これは斎藤環が治療の対象というふうには言ったけれども、精神障害に位置づけるというところまでは触れていないんです。精神障害という言葉をはっきりと使ったというところにこのガイドラインの新しさがあり、我々が注意しておくべきポイントがあるのではないかと考えます。

四つ目が、先ほども「する自己」をベースにして成り立っていると申しましたけれども、存在論的自己、「ある自己」の視点が無いということ。ということは、引きこもる主体という視点が無い。プロセスという把握が見られない。プロセスという把握が見られないと言うとガイドラインを読んだ人は、いやプロセスという視点があるのではないかと異論が出るかもしれません。

実際にガイドラインは引きこもりの諸段階ということで、4つのステージをあげているのです。

第一段階が準備段階、引きこもるということの準備段階という言葉を使っています。こんなふうには書かれています。「身体症状や精神症状や問題行動の一般症状が前段に出る時期」、これが準備段階、つまり行きたくないなあとか、ちょっといらいらするなあとか、そういう反応がでるということですね。

そして開始段階に入る。激しい葛藤の顕在化、家庭内暴力などの不安定さが目立つ時期

だという。

次に引きこもり段階へ。回避と退行がでて、葛藤が刺激されなければ目立たなくなるといふふうには言われています。

最後に社会との再会段階。

この四つの段階をあげているんです。だから、これは、プロセスではないか。そういう異論がでるかもしれません。

けれども、これはプロセスではないのです。プロセスとしては、非常に不十分である。なぜ不十分かということ、第一に引きこもるということに、準備段階なんていう言葉が使われるわけですよ。これは、どう考えてもおかしい。まるで、引きこもるということが予期されているかのごとき言葉です。そして開始段階。どう考えてもこの言葉の使い方、概念の使い方がよくないし、あたかも予期された行動のごとくとらえられているという点で、これはプロセスとはちょっと縁がないと思えるのです。

第二には、僕が2002年に『引きこもるという情熱』を出した時に、三つのプロセスをそこで提示しました。引きこもることの往路と、滞在期、そして引きこもることの帰路。行きとその滞在期と帰り道との三つの視点を出したんです。

僕は引きこもることの往路という言葉を使った。準備段階、開始段階というのは、この往路に相当するのでしょうか。それから引きこもり段階というのは、僕が言う滞在期という言葉に相当しています。社会との再会段階というのは、帰り道、帰路という視点に該当する。どう考えても僕のプロセス把握のほうがいささかまっとうな感じがすると思えます。

さらに第三として、プロセスとは言えないと、はっきりと言える視点があります。それ

は、往路、滞在期、帰路にはそれぞれのテーマがあるんです。本人・当事者に則して考えていった時に、存在論的自己、引きこもる主体といったところから考えていった時に、引きこもることの往路、それから滞在期、そして帰り道・帰路には、それぞれテーマがあるんだという視点に立っています。ガイドラインにはそれがまるでないんですね。ただ、その状態の様相、問題化の様相の変化というものが捉えられているだけである。これは、プロセスとは言えません。

それから段階という概念を使っているけれども、あまり厳密ではないというふうに言うことができます。ですからガイドラインは、プロセス的な把握をしているというふうに一見見えますけれども、実はそこには、様相の変化だけがとらえられているだけで、プロセス的な把握というのはまったくないというふうに言っていると思います。

たまたまKHJ親の会の通信を見たら、このガイドラインに全面的な賛意というか、ここに寄りかかろうというような姿勢をはっきりと出していました。何かとてもむなしくなるというか、惨憺たる感じになってしまったんです。社会的引きこもりの否定性に相変わらず乗っかっているその考え方に全面的に依拠していこう。で、彼らからすると僕らがやっていることというのは、全部楽天的な考え方だということになるわけなんです。

ですからガイドラインがこれからたぶん大きな力を振るっていくだろうということは十分予測されます。今申し上げた点はふまえておいていただけると、このガイドラインを読む上で、あるいはガイドラインの影響に対して距離をとっていくことができるのではないかと思います。

存在論的自己、つまり「ある自己」が、引きこもるということに対しては、先行するんだ、引きこもるのは存在論的自己「ある自己」なんだという視点を、僕は出したわけなんです。なぜ、引きこもるのだろうか？という問いを自らに課していくと、この往路におけるテーマというのは、すぐ見えてきます。それは、「ある自己」存在論的自己がその場にいたたまれなくなっている。これ以上ここに続けたならば、存在論的自己が壊れてしまう。そういう危機感、そういう意味での自己防御です。

存在論的自己の往路における課題は、自らをこれ以上の崩壊に身を任せることはできない、これ以上傷つけられてしまったら自分はいくら立ち上がることができないという、そういう意味での自らを守るという自己防御というテーマ、これが往路のテーマになります。ここでもっと仕事をしたんだというのが、社会的自己の思いですけど、存在論的自己が、でもここに居るのはつらいというふうに訴えるわけで、社会的自己は存在論的自己の訴えに従って、職場なり社会関係から撤退していくという選択をしていきます。これが、引きこもることの往路の問題になります。

往路から滞在期に入ること、これが実は一般的に引きこもりというふうに言われている状態をとらえたものです。この滞在期の課題というのは何なのか。これは簡単に言ってしまうと、社会関係職場関係において、存在論的自己が傷ついたわけで、傷ついた傷を修復していくという課題が、滞在期の最大のテーマになります。

つまり、ぎりぎりまで存在論的自己は社会的自己を支えようとするんです。つらいなと思っても、なんとか社会的自己がその場で居

続けられるように、存在論的自己は頑張るんです。ぎりぎりまで頑張っちゃうから、かなりその関係・環境で傷を負ってしまうんです。それをどう修復していくかということが、滞在期のテーマになります。

問題の掘り下げと整理

ここまでは、実は2002年に出した『引きこもるといふ情熱』（雲母書房）の本の中で言えていました。もう一つ今回「存在論的な引きこもり論」の中ではっきりこうではないかというふうに、もう少し踏み込んだ理解とすることができるようになったように思います。問題は、存在論的自己が傷ついたという時に、どこが傷ついたのか、修復しなければならない場所というのはどこなんだろうか。そしてこれを修復することによって、帰り道、帰路へ向うことができるとするならば、その傷ついた箇所というのはどこなのだろうか。こういう問いを、今回この本の中で発することができたわけです。

実は傷ついてしまったものというのは、内なる他者、内部にある他者や環境、あるいは社会とか世界と言ってもいいですけど、内部にある他者や環境に対する信頼というものが傷ついてしまったんですね。内部に培われていた他者や環境に対する信頼というものがあって、我々は外の世界と信頼的な関係を結ぼうとすることができます。

内なる他者や内なる環境への信頼があるから、外の世界にいる他者、外の世界の環境と出会い、そこで信頼関係を結ぶことができる。つまり我々が人と信頼的な関係を結ぶことができるのは、内側にすでに他者との信頼関係

を結ぶことができる力、環境を自らのものとして、信頼できるものとして、作り上げていくことができる力、他者や関係を受け止め、受け入れていく、一種の受容器のようなもの、そういうものが実は培われているんですね。だから、我々は、外へ出て行って、人との関係を結んだり、職場の中で仕事をしていくことができるんです。

つまり、そういう内なる力、外の世界の人間や環境を信頼していくための力というものが備わっている。その備わっている力が、その職場関係の中で弱められてしまう。傷つけられてしまう。世界を受け入れられるための受容器が、壊されてしまっている。それを修復するというテーマが、滞在期のテーマになります。

これが修復できない限りは、もう一回他者と出会うということ、もう一回社会関係あるいは外の環境というところと出会ってそこに適切な関係の世界を構築していくことができない。それが修復されない限りは不可能である。その修復に滞在期の最大のテーマがあるんだということが、今回見えたような気がします。

そのためには、滞在期の中で、自己間関係が最大の課題、困難になるんです。自己間関係とは何かというと、社会的自己と存在論的自己、「する自己」と「ある自己」の関係性です。この二つの相互の他者、存在論的自己にとっては社会的自己は他者であり、社会的自己にとっては存在論的自己は他者であります。

しかし、この他者は一対になって、初めて自己を形成しているわけです。この二つが対話したり、葛藤したりということをやりながら、さっき申し上げた内なる他者や環境を入れる受容器、力というものの再構築を図って

いくというのが、滞在期のテーマになっていくんです。だから、これはどの位時間がかかるかということに対して、明確な答えを出すことはできません。ただ、社会的自己と存在論的自己の対話、葛藤を、しっかりと支えることができるならば、まちがいなく再び帰道へ行くことができます。

社会的自己と存在論的自己が相互に助け合いながら、傷ついた自己を修復していくことができる。修復することによって、もう一回社会や世界との関係を結びなおすということが可能になっていく。ここをどう支えるかということに関しては、「社会的引きこもり論」の視点はずすということ、引きこもっている滞在期の事態を否定的に見ないということが必要であります。

今、自己間関係の対話葛藤が行われているのであって、それはやがてもう一度世界や社会と出会うための回路の作り直しをやっているんだという見方をとることができるならば、この滞在期を肯定的なまなざしで見えていくことができるのではないのでしょうか。そんなことを滞在期の問題として申し上げることができそうに思います。

そして、帰道、帰路ということになります。つまり、往路のテーマは防御、これ以上自分を壊されたくないということによる存在論的自己の防御がテーマであって、そのテーマに社会的自己はついていくということが引きこもりということの往路にあたります。

そして、滞在期は、存在論的自己が主体です。引きこもることの主体というものは、ここで問われ、そして存在論的自己を軸にして、社会的自己と相互の他者性の対話と葛藤というものが滞在期を形成していくだろうということが言えるように思います。さらに、帰り

道、これは、存在論的自己と社会的自己がもう一回うまい形で結び合わされるのです。

引きこもりということにおいて、往路では、社会的自己はここで仕事をしたいと思っても、もうだめだと存在論的自己が言うわけですから、ここで二つが背反してしまうわけです。引き裂かれてしまう。もう一回この滞在期を通ることによって、存在論的自己と社会的自己の結びなおしということが、この滞在期を通して可能になります。これが、帰道を形成していくのです。そして、帰路において、自らの社会の再構築、世界の再構築ということに基づいて、もう一度関係作りというものが可能になっていくのではないのでしょうか。

少し厄介なお話をしたように思いますが、本もお読みいただけたらと思います。読むことによって、引きこもりということの治癒を目指して書いた本です。本を読むことで治癒に向うということ、そんなことができるだろうか。できるというふうに自分なりに信じて、1冊の本を書き下ろしました。

どうもありがとうございました。

<終わり>

